

病害虫発生予察特殊報 第1号

病害虫名 インゲンテントウ *Epilachna varivestis*

1 発生確認までの経過

平成9年8月、農林水産省農業環境技術研究所の調査により、諏訪郡富士見町を中心に我が国では未確認のインゲンテントウと思われる害虫の発生が確認された。

病害虫防除所、野菜花き試験場、南信農業試験場及び諏訪農業改良普及センターは、8月12日に茅野市、諏訪郡富士見町及び原村のインゲンを中心に調査を行い、成虫、卵、幼虫、蛹を採集した。それらの標本を横浜植物防疫所へ送付したところ、インゲンテントウと同定された。

現在、茅野市、諏訪郡富士見町及び原村で発生が確認されている。

2 形態及び発生生態

(1) 形態

成虫の体長は5～8mm、体幅は約6mm、体色は灰色、黄色、赤褐色など変化に富んでいる。前翅には左右8個ずつ黒色の斑紋があり、軟毛が多く光沢がない。前胸背面には斑紋がない。幼虫はふ化直後で体長約1mm、成熟すると8～10mm、発育に伴い体色が淡黄色から橙黄色に変わる。また、幼虫の体には、縦に6列の枝分かれした棘（とげ）があり、その先端は黒化する。蛹は橙黄色で、食草などに4齢幼虫の脱皮殻によって付着している。卵は橙黄色で、長さ約1mm、卵塊として産卵される。

形態は、ナス科植物を加害するニジュウヤホシテントウやオオニジュウヤホシテントウと似るが、これら2種の前翅の斑紋は片側14個である。

(2) 寄主植物

インゲン、ベニバナインゲン、エンドウ、ウズラマメ、ダイズ、その他のマメ科植物

(3) 生態

本種は、ほ場周辺の土手や森林等の落葉の下で成虫越冬する。越冬を終えると、マメ科植物に飛来して葉を加害し、産卵を始める。卵は葉裏に40～70個の卵塊で産み付けられる。卵期間は春季10～14日、夏季約5日である。幼虫期間は春季約5週間、夏季約3週間である。蛹期間は約1週間。雌は羽化後2週間以内に産卵を始める。年間発生世代数はアメリカ南部で3～4世代、北部では1世代といわれている。原産地はメキシコ及びグアテマラで、分布地域は中央アメリカ及び北アメリカである。

3 被害

マメ科植物の中でも、インゲン類を好んで加害する。成虫も幼虫も主に葉裏から、網目状に食害する。葉がなくなった場合は、新芽やつぼみ、更に茎なども加害し、しばしば枯死する植物もある。被害が大きい時期は、発生の多い盛夏期の7月、8月である。

4 防除対策

(1) 卵塊や幼虫、蛹を見つけたらただちに除去する。

(2) 本種に対しては、エルサン乳剤、スミチオン乳剤、マラソン乳剤及びサイアノックス乳剤で殺虫効果があることが確認されている。